

スクールボランティアサミット 2013 資料

—地域の課題に取り組む（サービス・ラーニングを始めよう！）—

秋田県立仁賀保高等学校
教諭 五十嵐恒憲

1. 本校の特徴

普通科と情報メディア科から成る。1学年4クラス（普通3・情報1）規模の学校である。高校入試の点数で見ると、地域にある6高校の中で下から二番目に位置する。秋田県全体で見ても底辺に近く、学力・汎用的能力が低く自分に自信が無いという生徒が多い。

2. サービスラーニング導入の経緯

本校生徒の人間関係は「友人」と「それ以外」に二分されており、その中間に位置する人間と協力関係を築くことをひどく苦手としている。ある目的を遂行するために、必要な人間と適切な協力関係を築く能力を身につけさせるためにサービスラーニングの取り組みを始めた。また、サービスラーニングによって人間関係が広がることで、学習や成長に向かう意欲が増すことも期待していた。

3. サービスラーニングの実施方法

2013年に、私と生徒で「Benkyo & Volunteer 同好会（BV会）」という組織を立ち上げ、様々な企画を立案し、全校生徒から参加者を募って実行する形でスタートした。今年度で3年目に入っているが、学校全体でサービスラーニングを推進するには至っていない。同好会なので参加は生徒個人の意志によるが、常時40名程度が所属している。活動は多方面にわたるが、ほぼ一貫して次の方法を用いている。

- ①有志が集まり、やりたいことを考え、企画書の案（費用調達手段含む）を書く。
- ②責任を持って活動を推進する「リーダー」と、それを補助する「サポーター」を決める。
- ③リーダーとサポーターで企画書をまとめる。
- ④企画書に基づき、全校から参加者を募集する。
- ⑤リーダーとサポーターが協力し、必要に応じて外部団体と連絡調整を図る。
- ⑥実施上の課題を想定し、必要な準備と学習を行う。
- ⑦実施する。
- ⑧最初に設定した「成功の基準」を踏まえ、成果と課題について検証する。
- ⑨活動からBV会で共有すべき事柄を抽出し、BV会全体で共有する。
- ⑩次の活動に備え、学習すべき点があれば学習会を行う。

特徴

- ・活動内容は全面的に生徒に委ね、教師からの指示はしない。
- ・活動費用も原則として自己調達させる。（学校との交渉、助成金の申請など）
- ・ブレインストーミング、ロジックツリー、付箋を用いた「見える化」、ポスターデザイン等、話し合いやプレゼン、表現全般のスキルについては教師が指導している。
- ・外部団体との連絡調整は極力生徒に行わせ、教師の関与は必要最低限にしている。
- ・⑥⑩の「学び」を重視し、外部講師を積極的に活用している。
- ・⑨⑩や失敗の経験を次に活かせるよう、絶え間なく多くの活動を実施している。

4. サービスラーニングの成果と課題

生徒の成長と学習意欲の向上については疑う余地が無く、就職・進学ともにはっきりと効果が認められる。また、学校外の団体と協働する機会が多く、地域で本校生が活躍し評価されることが増え、生徒が自信をつけている。しかし、活動が充実すればするほど、他の教員が「大変そう」と敬遠気味になり、学校全体で推進する方向からは遠ざかるという矛盾も生じている。一部で強みに推進していくか、全体でほどほどに取り組んでいくか、自分の中でも正直決められずにいる。

5. 活動の実際

前述したように、年間を通じてかなりの活動を行っており全てを記載することはできない。そこで、特に効果が大きかったと思われる活動に絞って紹介する。
記載事項：①名称 ②内容 ③協働団体 ④学びについて ⑤その後へのつながり

23年度

①東日本震災復興支援ボランティア

- ②仲間を集め、ボランティアバスに乗って被災地へ行って活動する。
- ③秋田県社会福祉協議会・由利地域振興局
- ④ボランティア活動全般について、秋田県ボランティア協会の指導を受けた。被災者との接し方について、自殺対策に取り組んでいる秋田大学医学研究科准教授（臨床心理士）の指導を受けた。
- ⑤8月の大槌町から始まり、計9回被災地で活動した。その後の募金活動や報告会にもつながった。

①みんなでインターンシッププロジェクト

- ②全校生徒のためにインターンシップを企画し、参加者を集めて実施する活動。
- ③地元の保育園、病院、福祉施設、製造業の工場など
- ④インターンシップの意義や依頼方法などについてハローワーク職員から指導を受けた。連絡調整にあたっては、インターンシップ先の職員から様々な指導を受けた。
- ⑤保育園、病院、福祉施設については、今年度まで継続して行っている。

①エコキャッププロジェクト

- ②ペットボトルのキャップを集め、地元の集積所を経由してNPOに寄付する活動。
- ③地元のNPO
- ④ポリオや、途上国の医療の現状などについて調べ学習を行った。
- ⑤活動は現在も継続中。全校生徒に意義を伝え、多くのキャップを集めるには様々なスキルが必要になる。クラスでもプレゼンや、ポスターの作り方、成果の提示方法などのスキルが他の活動にも活かされている。

①地域イベントサポート活動

- ②地域のお祭りや福祉施設の行事などをサポートし、参加者を増やしたり、盛り上げたりする活動。
- ③地域のお祭り関係者、地域の福祉施設
- ④それぞれの福祉施設の特徴や入所者について調べ学習を行った。
- ⑤屋台の売り上げを伸ばす方法、ステージパフォーマンスで観客をのせる方法などに工夫が見られ、その後の活動に活かされている。年々サポートの依頼が増え、地域で喜ばれている。

24年度

①希望の環プロジェクト

- ②宮城・岩手の水産加工業者などを支援するため、商品を買って販売し、被災地支援を呼びかける活動。
- ③宮城・岩手の業者、道の駅や駅など販売場所を提供してくれる関係者
- ④生産者の被災状況や業者の特徴などについて調べ学習を行った。企業の売り上げアップのための戦略についても本やインターネットで学んだ。
- ⑤総売上109万円強。販売を繰り返す過程で、接客技能など様々なスキルが向上した。また、次の「復興支援セット」のプロデュースに直結した。

①「復興支援ギフトセット」のプロデュース

- ②被災地の物産品を詰めた「ギフトセット」を作り、企業の贈答品として利用してもらう活動
- ③秋田三菱自動車販売株式会社
- ④企業のイメージアップ戦略やマーケティング、CSRについて指導してもらった。
- ⑤3千円のセットを100セット販売した。依頼主のニーズと自分たちの理想をすり合わせ、合意を形にするというプロセスを学んだことが、25年度のスイーツ開発につながった。

①七夕プロジェクト・節分プロジェクト

- ②にかほ市の独居高齢者宅を訪問し、手作りのデザートと小物を贈る活動。
- ③にかほ市社会福祉協議会、にかほ市民生児童委員会。社協から助成金。
- ④にかほ市の福祉政策について市の職員から教わった。また、民生児童委員から、日々の活動の苦勞や地域の課題について教わり、意見交換を行った。七夕・節分に関する地域の風習については調べ学習を行い、デザートやデザインについては家庭科教員から指導を受けた。
- ⑤市の福祉政策には、財政上の課題から不十分な点や矛盾する点がある。市の担当者と民生児童委員の双方から話を聞くことで、福祉政策の難しさを学ぶことができ、視野が広がった。

①風鈴プロジェクト

- ②風鈴を作っている工房や企業から風鈴を提供してもらい、地元の子どもたちや障がい者と一緒に作った短冊を付け、仮設住宅の人に届ける活動。
- ③琉球ガラス風鈴、県外の風鈴工房（匿名希望）、秋田三菱自動車販売株式会社、地元の保育園、小学校、養護学校、知的障がい者厚生施設
- ④大槌町の被害状況や仮設住宅での生活について調べ学習を行った。
- ⑤協力業者や、短冊を作ってくれた人の思いを届けるという活動を通して、今まで縁の無かった人がつながるおもしろさ、その力の大きさを実感することができたようだ。それが次の「にかほ体験隊」という大事業につながった。

①「にかほ丸ごと体験隊」プロジェクト

- ②震災により秋田県内に非難してきた人を招き、一泊二日で交流する活動。楽しんでもらうだけでなく、参加者の体験を傾聴し学ばせてもらうことも目的とした。ホテルの部屋の準備や調理補助はインターンシップとして行い、お別れ会の料理や演出も行った。
- ③認定NPOあきたスギッチファンド、キリン福祉財団（以上、助成金提供団体）にかほ市、にかほ市教育委員会、にかほ市観光協会、県被災者支援室、由利地域振興局ほか
- ④助成金の申請とプレゼンテーション、市や教委との折衝、参加者の募集方法、被災者との接し方、ホテルでのインターンシップなど、多方面にわたり関係者から学ぶことが多かった。
- ⑤BV会が行ったはじめては総合的な事業で、生徒の力だけで行うのは困難を極めた。しかし得られた自信とスキル、ノウハウは大きく、その後の活動の財産となった。また、交流会で被災者から繰り返し教わった「自分の身は自分で守る姿勢」と「訓練の大切さ」が、次の「一泊避難訓練」に結実した。

①「みんなで一泊避難訓練」プロジェクト

- ②被災地から学んだこと、被災者から学んだことを活かし、自分たちが考え得るベストの避難訓練を企画し、全校生徒や市民から参加者を募り行う活動。また、訓練に引き続き、避難所を立ち上げ、避難所を運営し、参加者に避難所体験をしてもらう活動。
- ③秋田県総務課、秋田県防災士会、にかほ市、にかほ市教育委員会、にかほ市消防、同女性消防団
- ④防災・減災について、避難所生活について、避難所の運営について、防災教育についてなど、防災について多くの専門家・研究者から指導を受けた。県が実施した自主防災組織指導者研修会や、東京で行われた防災教育チャレンジプラン報告会などにも参加し貪欲に学んだ。
- ⑤活動そのものにも意義があったが、防災や防災教育に対する意識と知識が高まり、大人の施策を批判的に検討できるようになった。にかほ市防災会議には「人生の全期にわたる防災教育の実施」を提言し、それがにかほ市防災計画に反映されることになった。

①読み聞かせボランティア

- ②保育園や公民館などで読み聞かせを行う活動。
- ③朗読ボランティア・読み聞かせボランティア・音訳ボランティアを行っているNPO
- ④朗読や読み聞かせの仕方、音訳の仕方について、NPOから指導を受けた。
- ⑤「読み聞かせ」一つとっても、団体によって様々なやり方・工夫があることを学んだ。発声や読み方について集中的に学んだことで、自分の声や話し方に自覚的になりスキルが向上した。

25年度（8月まで）

①防災・減災啓発活動

- ②防災や減災につながる知識や習慣を広めるため、駅や道の駅で人々に呼びかける活動。
- ③なし
- ④今までの経験から情報を抽出し、整理し、人々に伝える内容と方法を学習した。
- ⑤今年度は日本海中部地震から30年という節目にあたり、改めて防災教育について考えている。高校生は一般的には防災教育を受けるべき対象と思われがちだが、BV会では防災教育を行う主体として高校生が活躍している。今年度は、地元の中学校が実施する防災教育の講師も依頼された。

①気仙沼・陸前高田訪問交流活動

- ②気仙沼や陸前高田の仮設住宅を訪問交流し、支援のあり方について考える活動。
- ③NPO法人秋田パドラーズ
- ④草の根的な被災地支援活動において県内随一の実績を持つ秋田パドラーズから、事前指導や現地での指導を受け、自分たちに何ができるかを考える契機とした。
- ⑤23年度、24年度と十数回にわたって現地で活動してきた。現在は作業的支援のニーズが無くなるとともに、ボランティアバスのような交通手段も無くなった。現地に行くことが難しくなった今、何が可能か、何をすべきか、NPOとともに考えたことが、スイーツのプロデュースにつながった。

①復興支援スイーツプロデュース

- ②地元の菓子屋と協働して復興支援スイーツをプロデュースし、菓子の販売を通じて震災の風化に歯止めをかける活動。東北六県を表現した6種類の味から成る「一口スマイルだいふっくん（大福）」と「がんばろう とうほくっきー」を販売している。
- ③地元の和菓子店と洋菓子店と協働。
- ④経費と寄付金の割合、宣伝の仕方、パッケージの工夫、菓子店との交渉、売り方などを学んでいる。
- ⑤一過性の活動でなく、継続していくためには菓子店にも相応のメリットがなければならない。そこを踏まえ、菓子店の考えと自分たちの理想に合意を形成し形にする過程がとても勉強になっている。今後の商品開発活動につながると思う。

①「みんなで一泊避難訓練」プロジェクトII

- ②24年度は3月実施の冬バージョンだったが、今回は8月に夏バージョンで実施し、夏場の訓練と避難所運営の課題を検証する。更に今回は、校内に生徒有志の自主防災組織を立ち上げ、非常時における教員との連携の在り方も検討する。
- ③協働する団体は前回とほぼ一緒だが、今回は「秋田県教育公務員弘済会」から助成を受けている。
- ④⑤実施前なので省略

①福島の高校生を秋田に！プロジェクト

- ②24年度に実施した「にかほ丸ごと体験隊」の別バージョン。今回は、福島県から高校生を招待し、リフレッシュしてもらうとともに、自身の体験や原発に対する考えを聞き、未来のエネルギー問題について一緒に考えるつもりでいる。
- ③にかほ市、にかほ市教育委員会、にかほ市観光協会。認定NPOあきたスギッチファンドから助成金。国際ソロプチミストからの活動奨励費も利用。
- ④⑤実施前なので省略

6. 終わりに

活動分野が広範囲にわたっているのは、生徒から「やってみたい」と希望があったものは否定せず、できるだけ実現させてきたからである。記載はしていないが、完全に失敗に終わった活動もあり、実施過程でのトラブルや失敗は枚挙にいとまがないほどである。しかし、BV会では、「若者には失敗する権利がある」と、一貫して努力の末の失敗ならかまわないという方針を採ってきた。現在、バングラデシュを支援しているNPOとの協働を準備中であり、今年度後半は海外に視野を広げるサービスマーケティングも実施の予定である。

情報交換したい方は、お気軽にご一報ください。 nobukazu.igarashi@gmail.com まで。